

真名子川支流への沢(仮称)

1990年10月21日

への沢(仮称)もナメが続いているが、二の沢(仮称)やホの沢(仮称)と異なるのは、ナメの終点が沢の終点とはなっていないことである。また、ナメの途中に小さな湿地もみられる。ナメが終了するとあとは細いミゾ状の流れとなってブッシュの中に消えてしまっていた。

[タイム] 出合(9:20)→遡行終了(9:30)

八溝山周辺の沢

八溝川源流右俣

1990年10月27日

9:00八溝川源流右俣の下降開始。林道真名畑八溝線から樹林帯の中へ入り込むと、3段になった木柵の土止めがあり、その下に砂防ダムがあった。右俣の流れはこの砂防ダムの下から始まる。水源は、中俣と同様、岩屑の下からしみ出る湧き水であった。

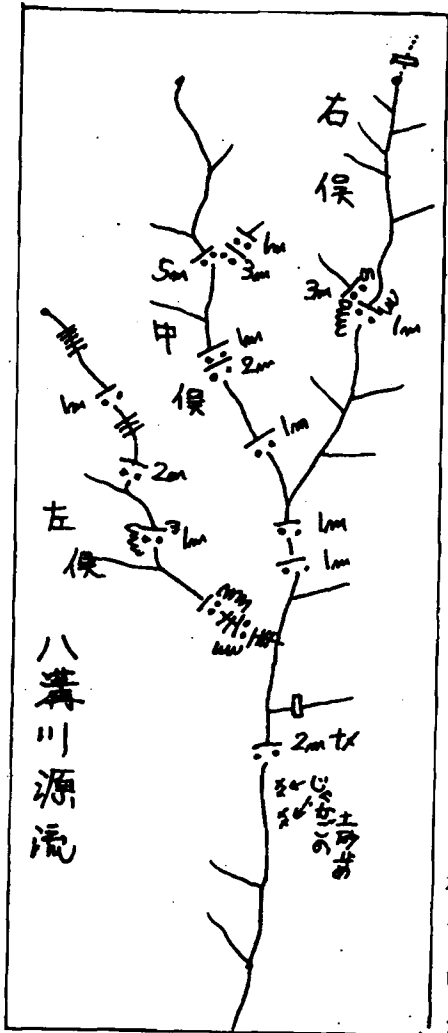
岩屑のいっばいつまった沢筋を下る。下るにつれて左右から支沢を合せ、水量は次第に増してゆく。平凡な沢を30分程下ったら、突然という感じで兩岸が岩場となって、沢相が険悪となった。でも、滝は1m程のごく小さなものがかかるだけ。それに距離も短く、この先はまた平凡となって、中俣出合まで続いた。9:40中俣出合に到着する。

(記)

[タイム] 右俣下降開始(9:00)→中俣出合(9:40)

八溝川源流中俣

1990年10月27日



6:30色づき始めたブナを横目で眺めながら下北沢出合から遡行開始。樹林帯の中をきれいな水が流れている。すぐに砂防ダム。これを越えた所で伐採作業が行なわれており、作業小屋が建っていた。

沢は樹林帯の中をゆったりと流れている。棚倉破碎帯の特徴である黒っぽい岩屑が沢の中や兩岸の山腹にゴロゴロしている。尾根をはさんで北側の宮川流域には花崗岩地帯が広がっていたが、八溝川の流域には存在しないようである。

遡行を始めて25分、最初の滝が出てくる。2m程の小滝であるが、釜が大きい。右岸から取り付いて越える。このあと10分程で左俣出合。左俣は兩岸から岩場が迫り、沢はナメとなっている。ちょっと興味がわいたが、後のこととして遡行を続ける。

7:15右俣出合。中俣に入る。ここまでは樹林帯の中を流れてきたが、ここからは左岸がまだ若い造林地となったこともあって、明るい沢登りとなった。ただ沢の規模はぐっと小さくなる。伐採後の枝などが散乱しているの

ではないかと心配したが、伐採後かなりの年月が経過しているのか、ほとんど見当らなかった。ただ、1カ所だけ半ば腐った流木が堆積しており、そこでは足を乗せたとたんに木が折れてめりこんでしまい、まるで雪山のラッセルをしているようであった。

このあと5mの滝。棚倉破碎帯を流れるこの沢で、大きな滝はかかるまいと思っていたが、5mとはなによりの落差である。おまけに、ナメ状ではなく垂直に落ちている。まず、釜をガッチリガードした倒木を乗り越える。そしてそのまま直登。ホールドは細かいが多数存在する。直登に手頃なといってよい滝であった。

8:00最後の二俣を左に入る。ここで造林帯とはお別れ、樹林帯の中の登りとなる。しかし、水量は激減してもう源頭近くを思わせる。やがて沢は小さな岩屑で